

## 「奴隷と主人」

2019年02月28日

エフェソの信徒への手紙 6章5節～9節 奴隷たち、キリストに従うように、恐れおののき、真心を込めて、肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとして、うわべだけで仕えるのではなく、キリストの奴隷として、心から神の御心を行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。あなたがたも知っているとおりに、奴隷であっても自由な身分の者であっても、善いことを行えば、だれでも主から報いを受けるのです。主人たち、同じように奴隷を扱いなさい。彼らを脅すのはやめなさい。あなたがたも知っているとおりに、彼らにもあなたがたにも同じ主人が天におられ、人を分け隔てなさないのです。

「著者」は、次に奴隷と主人について書いている。「奴隷たち、キリストに従うように、恐れおののき、真心を込めて、肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとして、うわべだけで仕えるのではなく、キリストの奴隷として、心から神の御心を行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。」奴隷たちは主人に気に入られようと、見せかけで取り繕うのではなく、キリストの奴隷として、キリストに仕えるように、真心を込めて喜んで仕えなさいと勧めている。奴隷であっても、自由な身分の者であっても、善いことを行えば、主イエスから報いを受けるように、奴隷も主人に善いことを行えば、主人から報いを受けられる。主人たちに対しては、「主人たち、同じように奴隷を扱いなさい。彼らを脅すのはやめなさい。あなたがたも知っているとおりに、彼らにもあなたがたにも同じ主人が天におられ、人を分け隔てなさないのです」と、奴隷を怯えさせてはならない、奴隷にもあなたがたにも同じ主人である神が天におられ、人を差別なさないと言う。

この勧めを読んで、「著者」は人の良い、善良な人だと思わされる。奴隷は労務のための、主人の「物」であり、売買・譲渡の対象であった。いくら、主人が人を分け隔てなさない神を知っていても、奴隷は存在そのものが差別の中に置かれている。ローマ帝国時代は、多様な奴隷がいたようで、家庭教師や医者なども奴隷の仕事であったらしいが、人権のない「物」であったことには間違いない。パウロは、主人から逃亡してきた奴隷オネシモを主人の下に送り帰す「フィレモンへの手紙」を書いている。その中で、「オネシモをわたしと思って受け入れてください」と頼んでいる。オネシモは耐え難い苦悩を強いられ、逃亡したのである。多くの奴隷たちは同じような苦境を生きていたであろう。

古代、中世において、侵略されれば、領土、財物は奪われ、人間は奴隷とされた。奴隷は当然と見なされていた。古代ギリシアの都市国家で民主主義が称えられても、米国の「独立宣言」で人権尊重が謳われても、それは市民権を持つ者のみが享受できた権利であり、奴隷たちは法の外に放置され、生存権さえない状況であった。奴隷制度への疑義は、18世紀のイギリスで主張され始めた。そして、米国のリンカーン大統領が奴隷制廃止を目指し、南北戦争に勝利し、1862年に「奴隷解放宣言」を出した。歴史は勝者が紡ぐので、敗者に陽の当たるには、驚くべき年月が必要であった。そして、現在も陽は当たってはいない。

自由にもものが言えるところに「愛」が生まれる。「ノー」が言えない奴隷には、主人との間に真の愛が生まれることはない。上記の「奴隷と主人」に関する勧めも時代の価値観に縛られた勧めとして読まざるを得ない。今日は奴隷制を認める国家、社会はないが、実質においては、人権も、生存権さえ認められない奴隷的な存在があることに目を留め、小さくとも抗議の声を挙げるのが求められている。